

## 骨髄提供後、急性C型肝炎を発症したドナーについて (調査結果報告)

財団法人骨髄移植推進財団  
理事長 正岡徹

本年4月15日にご一報いたしました、2月上旬に骨髄バンクを介して骨髄提供した30代の男性の方が、提供後、約40日後に急性C型肝炎を発症していることが判明した件につきまして、このたび、本件調査委員会から調査報告が提出されましたので、お知らせいたします。

### <調査委員会の結論>

当該採取施設における院内感染の可能性は否定され、骨髄提供によって骨髄提供者にC型肝炎ウイルスが感染したとは考えられない。

### 概要

2月上旬に骨髄バンクを介して骨髄提供した30代男性の方から、3月下旬「1週間前から腰に痛みがあり、強くなっている。腰全体と脇腹の背中側が掴まれるように痛い」との連絡がありました。4月上旬に近医の内科を受診したところ、肝機能に異常が認められ入院となり、検査を実施しました。

4月中旬に入院先の主治医より急性C型肝炎との検査報告がありました。骨髄移植推進財団では、外部の専門医を加えた医師による調査委員会を設置し、採取病院の院内感染の可能性や、ドナーの方の生活状況の確認と調査を実施しました。

当該施設に対する現地調査等を実施した結果、院内感染の可能性は否定され、骨髄提供時およびそれに伴う入・通院中に骨髄提供者にC型肝炎ウイルスが感染したとは考えられないとの結論に至りました。

## 骨髄提供後、急性C型肝炎を発症したドナーについて (調査委員会報告)

### (調査結果)

・骨髄移植を受けた患者のHCV-RNAの検査結果は陰性であることから、骨髄提供者は骨髄提供時点ではC型肝炎ウイルスが陰性であり、骨髄提供後にC型肝炎ウイルスに感染したものと考えた。

・骨髄提供後の入院中における、院内感染も想定したが、骨髄採取術に係る一連の医療行為に関わった医療従事者は全員HCV抗体陰性で、C型肝炎感染者は存在しなかった。かつ、骨髄提供者が入院中に同じ病棟に入院していたC型肝炎患者2名のHCVサブタイプ解析結果は骨髄提供者とは異なっていた。

・自己血輸血は手術中及び手術終了後に実施された。自己血採血バックのラベルには骨髄提供者が自筆でサインしており、手術開始前に確認していた。

自己血バックの管理は輸血部で行われており、骨髄提供者の自己血バックは専用保冷庫で保管管理されていて、同期間中に、他患者の自己血バックを保管した事実はなかった。

よって、自己血バックの取り違いはなかったと考えられた。

なお、自己血輸血を施行した医療従事者のHCV抗体も陰性であった。

・骨髄採取の手術中に使用した器具の一部は非ディスポであったが、挿入管ブレードは簡易滅菌器、ビーカー・メッシュはオートクレーブで滅菌処理がなされていた。なお、オートクレーブの滅菌記録においては正常に滅菌が行われていた。

よって、骨髄移植患者がHCV-RNA検査の結果、陰性であったことと併せて考えれば、骨髄採取時に使用した器具がC型肝炎ウイルスに汚染されていた可能性はないと判断された。

また、骨髄採取時に使用した薬剤は手術室内で開封しており、使い回しはしていない。

### (考察・結論)

・本事例について、骨髄採取術に係る一連の医療行為(術前健康診断、自己血採血、骨髄採取術、術後健診)を通じてC型肝炎ウイルスが骨髄提供者に感染した可能性はほぼ否定し得る。即ち、骨髄提供によって骨髄提供者にC型肝炎ウイルスが感染したとは考えられない。

以上